等の大儀ましませば、その事沙汰つかふまつらむため、江戸將軍名代として上洛つかふまつらせ給ふよし答へ給ふ、四月十二日、京にて即位（後水尾）の大禮行はる、大御所裏頭にてうち〳〵御覽じ給ふ、一乘院門跡尊勢、日野大納言入道唯心等侍座す、よて他人此禮拜覽する事をゆるされず、大禮はて、勸修寺中納言光豐卿の亭に渡御有て、御裝束を改め給ひ、御參內有て賀したまふ、義直、賴宣兩宰相もまたがひ參らせらる、（略節）

〔大猷院殿御實記六〕寛永七年九月十二日、京にて新帝（後正明）御即位あり、皇女御位につかせ給ふ事、ならの京の後は、八百餘の星霜をへて聞えざれば、外戚の威權によらせ給ふなど、天下後世の異論をおそれはゞからせ給ひ、先にも諫めさせ給へども、上皇（後水尾）御脫屣の思召立定まらせられ、にはかに英斷ありし事ゆへ、こたびは關の東にも敢てのたまふ旨なく、酒井雅樂頭忠世、土井大炊頭利勝をのぼせられ、兩使うち〳〵參內し、庭上にて大儀を拜覽せしめらる、

〔聚樂物語〕當君（後陽成）御即位の事

先帝正親町院の御宇には、諸國の兵亂いまだまづまらず、王城守護の武士どもゝ一とせがうちも在京せず、かなたこなたへうつりかはりければ、國々のみつぎものもとゞこほり、天下のまつりごともかれ〳〵にて、（中略）あさましき世の中にて、親王せんげの儀式もなく、御即位をなし給ふべきたよりもましまさねば、太子（陽光院）いたづらに三十年四十年の春秋をおくりたまふ事を口惜くやおぼしめしけん、いつしからう氣をいたはり給ふ、大閤秀吉卿御痛はしくおぼしめし、いかにもして御なう平癒なし奉り、御位にたゝせたまふやうにと、さま〳〵御心をつくし、典藥大醫におほせ付られいれうをつくしけれども御戒行やつたなくおはしけん、天正十四年七月下旬に終にかくれさせ給ふ、大閤本意なくおぼしめし、せめての御事に此君の王子（後陽成）をいそぎ御位に付たまふべきとて、同十一月廿五日に御即位をすゝめ奉り、諸國のかちはんをやうを